

10 研究成果の評価

本研究班は進行性筋ジストロフィー症患者の医療を直接担当している医学者を中心に構成されており、基礎的研究と相まって診療の実際に則した精細な研究を遂行していることに特色がある。研究対象が原因不明の難病であるために、その業績は地味であるが、研究班発足以来の成果の蓄積は甚だ大きく、患者の日常生活の改善、病勢進行の防止、延命に貢献するところがきわめて大であった。さらにこの研究班の存在は、班員の研究意欲を鼓舞し、各施設における診療のレベルアップを促したことにも意義が認められる。また、1950年度から当研究班では、テーマの増加に対応して、関連分野の研究を一括し、以下にのべる各部会に区分した。それによって班員の研究の重複が避けられるようになり、かつ研究者相互の連絡が円滑に行われるようになったことも評価される。

以下各部会ごとに評価することにする。

1) 機能障害進行過程の分析

脊柱変形の研究では分類とその病態生理的意義が検討され、その結果側弯進展の予測、予防について有益な示唆がなされた。咬合、咀嚼の異常の分析は顔面筋、咬筋の萎縮の面からの検討が続けられ同時にDMP患者に適した口腔衛生法の開発も試みられている。四肢の筋萎縮、機能低下については運動能、筋電図を指標にくわしく検討されている。これらの研究はすべて各病期のDMP患者についてなされたもので、本研究班員にしてはじめて可能な研究であるといえる。これらのデータはDMP病勢進行過程の分析とそれに基づく治療手段開発の重要な基礎資料となるので、今後の継続研究とデータの積み重ねが望まれる。今までに本研究班が開発したリハビリテーション機器で、上記のデータ分析によるものが少なくない。

2) 病態生理学的研究

骨格筋については組織化学、電子顕微鏡観察が導入されて、DMP患者、保因者、その他のミオパチーについて研究が開始された。DMPの心臓病理学は本研究班員の研究によって格段に推進された。本年度はさらに各種の心機能測定法を用いて、心変化の早期発見、病変の推移の観察、心不全の予防治療、筋力増強訓練の心におよぼす影響の検討などがなされた。心肺機能の研究は、患者の予後判定や過度の運動負荷を防止するために重要であり、貴重な成果がもたらされている。各種の筋疾患について、筋血流量の測定を行った研究は、DMP発症の微小循環障害説の検討として結果が期待される。昨年につづきDMP患者のインフルエンザ予防が検討されているが、ワクチンの効果がみだされた。女性のDuchenne型DMP患者の研究は共同研究としてとりあげられ、疫学的に大きな成果をあげた。

3) 心理障害・生活指導の研究

心理の問題はDMP患児や家族にとって関心の深い領域であるが、問題の性格上患者に接する立場の医師でなければ立入り難く、また研究方法の開発とそれに習熟することが必要であったため、本研究班以外ではとりあげられることが少なかった。本研究班ではすでにホスピタリズムの発生要因、病勢進展に伴う心理異常の検討など多くのデータが集積されている。本年度は「筋ジストロフィー者の心理特性とそのCare」と題する研究報告がまとめられ、関係者に配布された。これは従来までの知見の総括として貴重であるばかりでなく、今後の研究、また患者のCareの向上に資するところが大

きい。山田班において、このようなユニークな研究がなされ、着実な進歩がみられることは高く評価されてよい。

4) 療護機器開発の研究

筋萎縮とともに進行する運動障害を緩和し、日常生活をより快適にし、またリハビリテーションをより有効ならしめるために、本研究班ではすでに多種類の装具、機器を開発、改良し、多くの施設において実用化されている。本年度は増加試作研究として、5施設に配布されていたスライドストレッチャーの評価がまとめられ、活用の道が開かれたとみられる。このほか電動起立車、電動車椅子、歩行用装具などの試作改良に実際の使用を通して検討がなされている。これらの実際的な業績も本研究班の活動の特異性を示すものであり、注目されることである。

5) 看護に関する研究

患者の看護とくにDMPのごとき疾患の看護には、人類愛の精神と経験を生かした細やかな心遣いが必要である。この部会の研究には、なによりもまず、このような基本精神が日常の看護全般に生かされるよう十分配慮されている。本年度の業績としては、共同研究による看護基準が完成したことを喜ぶ。これが今後一層の創意を促し、看護の向上と患者の福祉に大きな役割りを果たすと期待される。

6) 栄養に関する研究

栄養は病勢の進行や合併症罹患など予後に関わる重大な諸因子に影響を有している。この部会ではアミノ酸代謝、蛋白質、脂質代謝について研究がなされ、蛋白摂取量の基準について試案が出されている。また栄養と関連して貧血、血清蛋白とくに免疫グロブリンの変動などがくわしく検索され、患者の栄養改善について地道な成果があげられている。

7) 生化学的研究およびその他の基礎的研究

昨年につづき染色体分析、発生分化過程に対応した筋の形態機能再面からの検討がなされ、筋の変性と再生機転解明に資するところがあった。DMPのクレアチンキナーゼ、アイソザイム、G6PD、H、ミオシンATPase、アデニルサイクラーゼなどについて酵素化学的検索がなされ成果があった。ほかに筋肉の間質結合織異常、内分泌動態追究の試みもみられる。生化学的研究は本研究班のなかでは新しい分野に属し、業績はまだ少ないが、DMPの発症機構や病変の本態解明に結びつきうる研究である。また実際面では保因者の発見などに応用できるなど今後の成果が大いに期待される。

8) 共同研究

長期間をかけて検討されていた看護基準が完成したこと、Duchenne型DMPの女性患者が36名発見されたことなどが本年度の大きな成果である。心理特性の研究は、各施設の協力のもとに173例の資料が集められたが、解析は翌年にもちこされた。

評 価 委 員

檜 澤 一 夫
井 上 満

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本研究班は進行性筋ジストロフィー症患者の医療を直接担当している医学者を中心に構成されており、基礎的研究と相まって診療の実際に則した精細な研究を遂行していることに特色がある。研究対象が原因不明の難病であるために、その業績は地味であるが、研究班発足以来の成果の蓄積は甚だ大きく、患者の日常生活の改善、病勢進行の防止、延命に貢献するところがきわめて大であった。